

インターネット時代の 読書推進システム構築 に関する研究

2018～2019 年度 私立大学図書館協会研究助成
「機関研究」報告書

福山大学附属図書館

2020 年 5 月 25 日

目次

1.はじめに.....	2
2.本研究の背景・目的.....	2
3.読書推進システムの概要.....	3
4.シンポジウムまでの準備状況—高校読書指導者との打合せを中心に.....	5
5.シンポジウム.....	6
6.本研究調査の結果—本学における読書推進の成果.....	9
7.本研究の結論.....	9

資料編

資料 1. 福山大学附属図書館読書推進システム 注文の多い図書館 (2019)	10
資料 2. 利用者アンケート項目 (高校)	14
資料 3. 利用者アンケート項目 (大学)	15
資料 4. 利用者アンケート結果 (高校)	20
資料 5. 利用者アンケート結果 (大学)	23
添付資料. 「福山大学附属図書館読書推進システム 注文の多い図書館」パンフレット	

1.はじめに

本研究は、福山大学附属図書館(以下、本学図書館という)における学生の図書館利用活性化を目的とした読書推進システムの立ち上げと、その効果についての調査である。また、毎年利用者の減少が問題となっている大学図書館において、その解決に向け、福山大学(以下、本学という)大学教育センターおよび本学図書館運営委員会の協力を得て取り組むものである。その背景には、大学における専門教育(「書く」能力の育成)の隠れた課題である、読書の習慣が少ない現代の学生における「読む」能力の育成と習慣化の問題がある。

本学では、全学の学生を対象に、オンラインの学修支援システム(「manaba」朝日ネット)を導入している(これを「Cerezo」と呼ぶ)。「Cerezo」の中の教材配信や学生との双方向的な指導を実施するコースに、本システムを設定した。それは、質問・応答形式によって帯の作成と書評提出まで導く、e-learning による読書推進システム(名称「注文の多い図書館」)である。本システムは、学生が親しんでいるモバイルにより、授業外でも一人で取り組むことが可能となっている。このように、当該読書推進システムは、本を読むことへの抵抗感を減らすとともに、読書意欲向上と習慣化を企図して、附属図書館、図書館運営委員会と大学教育センター「日本語表現法」主幹とが連携して立ち上げ、特に「習慣化」ということについては、近隣高校の読書指導者とも連携して実施の検証を目指したものである。

2.本研究の背景・目的

前述のとおり、本研究は学生の「読書率の向上」と、専門教育の中核である「読む」能力の育成を目的としたものである。当該読書推進活動は、「子どもの読書活動の推進に関する法律」(法律第 154 号、平成 13 年 12 月 12 日付)施行以後、国家的課題とされている若者の活字離れに対して、大学図書館の活動として、読書率向上と図書館利用活性化を目指したものである。また、大学の専門教育の到達点は、アカデミック・ライティング＝「書く」能力の修得である。その成果物である卒業論文(卒業制作を含む)を「書く」上では、先行研究となる論文・書物を「読む」(批判的に読む)ことが必須である。現在のわが国では、高校生の読書率が低く(高校生の不読率 55.3% 全国学校図書館協議会、第 65 回学校読書調査 2019 による)、読書の習慣が少ない現代の学生の指導においては、「読む」能力をどう育成するかが専門教育の隠れた課題であり、それには、授業外で一人でも行える環境の設定が必須であると考えた。ここでいう「読書推進システム」は、上記の通り、そのような「読む」能力育成のための、e-learning を可能にするオンラインシステムを指しており、本研究の目的は、そのシステムが専門教育の基礎としての読書意欲向上に及ぼす効果を検証し、システムの向上と読書の習慣化に繋げることである。

研究計画として、本学では、2017 年度後期から、附属図書館と大学教育センター、共同利用センター(ICT部門)との連携により、学内におけるインターネットを活用した学修支援システム

「Cerezo」を活用した「福山大学附属図書館読書推進システム 注文の多い図書館」(資料 1 参照)を構築し、初年次教育の「日本語表現法」において実施している。本システムは、帝京大学附属図書館による「読書術コース」をモデルとしている。2018 年度は、各学部から推薦する、専門教育に必要な図書(新書等)を図書館に複本で揃えて 1 年生に本システムを体験させ、それについてのアンケート調査を行って読書意欲に関する効果を調査した。読書の習慣化という側面から入学前の高校生にも本システムを紙媒体で実施し、同様の調査を行った。2019 年度は、本学1、2年生に同様の調査を実施し、前年度との比較調査を行い、それを元に帝京大学、参加した近隣高校の図書教諭等と、読書教育についてシンポジウムを開催して、オンライン読書推進システムの評価を行い、今後の課題を明らかにすることとした。

実施方法として、2018 年度は、本システムを本学の学生と、賛同を得られた近隣高校の図書館関係者の協力を得て、高校生に実施し、それについてのアンケート調査も行った。12 月にその集計結果を踏まえて、本システムの効果を検証し、報告書としてまとめ、近隣の高校・大学にフィードバックした。2019 年度も同様に調査を実施し、11月に読書教育についてのシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、本システムのモデルとした「読書術コース」を構築された、帝京大学メディアライブラリーセンター学術情報グループリーダー・中嶋康氏(以下、中嶋氏)を招き、中嶋氏の基調講演と協力を得た近隣高校の読書指導関係者をパネラーとして、本システムの読書意欲に関する効果を検証した。

3. 読書推進システムの概要

本システムは、「読む」・「書く」を連動するところに特徴があり、3 つのコースを設け、段階的に読書行為に取り組み、オンライン上で選んだ本の内容についての質問事項に答えるという構造になっている。第一コースは、原則として本学図書館の蔵書から選定することを推奨しており、第二・第三コースは、本学図書館に所蔵が無い本や、過去に読んだことのあるものからの選定も可能とした。また、本学の一年生を中心にシステムに取り組みに当たって、前述のとおり、各学部教員(図書館運営委員)にシステムに取り組みやすい図書を選定してもらい、学術的内容でありつつも、学生の手に取りやすい本を候補として提示することにより、読書に慣れていない学生でも、本を選ぶという行為をスムーズに行えるよう配慮した。

実際に取り上げる本として、本学学生に提示したリストは 7 種類あり、教員が薦める本として「学科推薦図書」、学生が薦める本として、本学学生が新入生に向けて推薦する本の書評をまとめた冊子『新入生にすすめる 50 冊の本』に掲載された本 50 冊(2017 年度版と 2018 年度版の 2 種類)と、本学図書館の学生ボランティア団体、図書館倶楽部の選定した「図書館倶楽部選定図書」、2017 年から開始し、図書館内で年 2 回開催しているブックハンティングイベントにて、学生により選定された図書「ブックハンティング選定図書」、また、一般的に手に取りやすい本として「本屋大賞受賞の本」と、広島県内にゆかりのある作家の作品を纏めた「郷土作家本」、図書館に

入って最初に目に入る「新着本」を候補として提示した。システムの実施期間中は、すべて、館内に特設のコーナーを設けて、「学科推薦図書」コーナーでは推薦教員のコメントも提示し、学生に案内しやすく手に取りやすいよう配置した。

第一コースは「読書意欲喚起コース」として、本を手にとるところから始めた。本を「表紙」や「タイトル」から選ぶところから始まり、選んだ本の「何に惹かれたのか」「タイトルはどういったものか」「タイトル、目次や前書き・後書きから惹かれたところは」「本をざっとめくってみて推測する内容はどんなものか」などの質問に答え、答えをつなげてキャッチコピーを考え、その本の帯を作成して提出するものである。

第二・第三コースは「読書技能修得コース」「書評執筆コース」とし、本を読み、最終的に 400 字程度の書評を書いて提出するというものである。主な調査対象は、本学 1 年次生および高校生とし、大学に入学してからの読書の習慣化にどの程度繋げられるかを検証する。

2018 年度は、本システムの正式稼働の第一年目で、図書館が、本学 1 年次必修科目の「日本語表現法」の授業担当者に依頼し、受講生(50 名余)を中心とした学生を対象として、前期・後期に二度実施した。また、近隣高校 166 校に参加を依頼し、快諾の得られた盈進中学高等学校、広島翔洋高等学校、尾道中学校・高等学校、広島県立油木高等学校の 4 高校の図書館、および国語の教科担当者に依頼し、高校生約 250 名がモニターとして参加した。

2018 年度の実施状況は、以下のとおりである。

1、読書推進システム第一コース 帯の提出 提出者 81 名

帯コンテストを実施 オンライン、「Cerezo」上のアンケート機能で投票。

投票数の多い順に、1～3 位を表彰し、図書館内で展示した。

2、読書推進システム第二・三コース 書評の提出

①本学 参加学生数 50 名 書評提出数 82 作品(前期 37 後期 45)

②高校生 参加生徒数 250 名 書評提出者 250 名

当年度に参加した学生より投稿された作品で、書評コンテストを実施した。高校生の書評は、本学図書館運営委員会が審査し、優秀作品を決め、表彰した(最優秀賞 5 名)。本学学生については、図書館運営委員会の協力を得て上位 40 名程度を選出、『新入生にすすめる 50 冊の本 2019』に掲載した。

2019 年度は正式稼働 2 年目として、前年度に見えてきた改善点や課題を反映させ、システム回答画面の改訂から、質問内容への補足事項を追加した。2019 年度の実施状況は以下の通りである。

1、読書推進システム第一コース 帯の提出 提出者 149 名

帯コンテストを実施 オンライン、学内限定学修支援システム上のアンケート機能で投票。

投票数の多い順に、1～3 位を表彰し、図書館内に展示した。

2、読書推進システム第二・三コース 書評の提出

①本学 参加学生数 940 名(前期 830 後期 110)

書評提出数 133 作品(前期 130 後期 3)

②高校生 参加生徒数 137 名 書評提出者 137 名

これらの提出物の他に、システム利用者には利用者アンケート(資料 2、3 参照)を実施した。その結果(資料 4、5 参照)で特筆されるのは、「携帯端末等で答えるのは楽しかったですか」という問いに対して、「非常に楽しかった」26%、「楽しかった」61%で、87%の大学生が楽しかったと回答しており、高校生は「非常に楽しかった」42%、「楽しかった」55%で、97%が楽しさを感じていることが分かった。これにより、オンラインを交えた、この度の回答方法が現代の学生に適していることが明確に伺えた。改善点としては、質問項目について分かりにくいと答えたものが、大学生で回答者全体の 19%、高校生で 27%おり、質問項目の表現などの改善が必要なことが分かった。

2019 年度は、さらに今回参加した学生を主対象に 1 年目のシステム利用が読書の習慣化に結び付いているかを検証するとともに、この調査を踏まえて、読書推進システムの有効性検証についてのシンポジウムを実施した(2019 年 11 月 30 日)。シンポジウムでは、本システムのモデルとなった帝京大学「読書術コース」の責任者、中嶋氏に基調講演をお願いした。加えて、「朝読書」の推進者である現倉敷商業高等学校国語科教諭の妹尾和弘先生(以下、妹尾先生)を筆頭に、本学大学教育センター・日本語表現法主幹、竹盛浩二准教授(以下、竹盛)、本学附属図書館長青木美保教授(以下、青木)、本学図書館司書、および参加協力高校の読書指導者 4 名がパネリストとして出席した。シンポジウムの主題は、本学のオンライン独習型読書システムについて、帝京大学の「共読」、「心を育てる朝読書」の実績を踏まえて、評価を行うとともに、高校生の読書実態から、読書の習慣化にどのような方策が必要かを討議した。

4. シンポジウムまでの準備状況—高校読書指導者との打合せを中心に

本研究の開始に当たって、近隣高等学校の参加をよびかけるために、本研究の趣旨とともに、本システムの紙媒体(パンフレット(添付資料))を広島県内及び周辺高校 166 校に郵送した。その呼び掛けに応じて 4 高校(広島県立油木高等学校、広島翔洋高等学校、学校法人尾道学園中学校・高等学校、学校法人盈進中学高等学校)が参加した。

シンポジウムに先立って、4 高校の読書指導担当教諭との打ち合わせを 2018 年度から 4 回開催した。その打ち合わせの中で見えてきたことは、学校によって読書指導体制が異なり、それぞれの状況に応じた読書指導が行われていることであった。このことは、読書環境として多様なあり方があること、それによって高校生の読書の現状を知ることにつながり、本研究においては都合の良いことであった。それに応じて、本システム実施について、大きく三つの方法があった。第一に、司書教諭が図書館の活動として実施する場合、第二に、司書教諭が国語科に依頼して実施する場合、第三に、国語科教諭(司書教諭を兼任する場合を含む)が国語の授業の一環として実施する(総合学習を含む)場合の三つである。

したがって、本研究においては、参加高校それぞれの実施体制に応じて本システムを実施し

てもらい、最終目標として、そのコースの成果として、紙媒体のシステム実施の過程の回答と書評(帯の作成は任意)、および利用者アンケート(資料 2)の提出をお願いした。提出された書評作品は、本学図書館運営委員が審査し、各高校にそれぞれ優秀賞(賞状)を贈呈した。

一方、本学における実施の方法は、初年次教育科目「日本語表現法」(全学必修科目)の中で、司書がシステムについて説明し、学生が各自取り組んで、オンラインで回答を入力、最終的に帯と書評をオンライン上で提出、同じく Cerezo 上で利用者アンケート(資料 3)を実施した。

シンポジウムにおいては、それぞれの実施状況と利用者アンケートの結果を報告し、その問題点の抽出を踏まえたシステムの評価を行うことを申し合わせた。

そのうえで、本システムのモデルとなった帝京大学MELIC(メディアライブラリーセンター)の「読書術コース」に関する基調講演、および中学・高校における「朝読書」の推進者の高等学校国語教諭による実施報告を踏まえて、本システムの独自性を明確化し、また問題点の抽出に努めることを合意した。

5.シンポジウム

2019年11月30日(土)、学校法人福山大学宮地茂記念館(現、学校法人福山大学社会連携推進センター)で本研究に関するシンポジウムを開催した。本シンポジウムは、読書推進のためには本の読み方を身に着けることが必要だという考え方を確認するとともに、本の読み方の独習方法について検証することを目的として実施した。具体的には、附属図書館が作成した〈福山大学読書推進システム「注文の多い図書館」〉の実施報告と、その効果の検証を行った。開催にあたり、本研究は、私立大学図書館協会の研究助成金(2018年度～2019年度)を受けていることを示し、「大学図書館問題研究会広島地域グループ」「広島県高等学校教育研究会図書館部会福山地区支部」「広島県私学教育研修会図書館教育部会」の協賛、「広島県教育委員会」「福山市教育委員会」「尾道市教育委員会」「三原市教育委員会」「府中市教育委員会」「中国新聞備後本社」の後援を受けて実施することができた。その結果、大学が5校、高校が14校、中学校が1校、特別支援学校が1校、NPO法人が1団体から参加があった。広島県及び岡山県の図書館関係者を中心に、一般の読書グループ関係者など50名ほど、多方面からの多くの参加者で会場は満席となった。県内だけではなく岡山県からの参加もあり、その広がり大きな喜びを感じた。



発表者の様子



会場内・参加者の様子

本システムの特徴は、読書への誘いを目的とした自立した独習システムという点であり、本学では学内限定のオンラインのシステムとして動いている。パソコンの画面上で展開する質問メニューに沿って、「本の帯」と「書評」を作成し、提出もオンラインですることになっている。自立システムと言うものの、初年次教育科目「日本語表現法」の授業において、主旨・目的・操作の方法などについて図書館司書が案内をした。これによって、全学の1年生に周知することとなり、さらには全学の学生が利用できるように、学生全員にアクセス権限を持たせている。本学におけるこのようなシステムの運用に加え、地域の高等学校にも参加を募り、4校の高等学校の参加協力を得た。高等学校の場合は、システム環境を考慮し、紙媒体を使用した。読書の習慣作りという観点から、高校・大学と続けてこのシステムを継続的に利用する流れを作るために、さらには高等学校の実情を踏まえた検証のためにも、高等学校の参加は重要であると考えており、このシステムによって提出された作品について、大学生部門と、高校生部門とで「書評コンテスト」も行った。シンポジウムは次のようなプログラム構成で実施し、本システムの効果の検証を行った。

第一部 読書推進活動「注文の多い図書館」の成立まで

第二部 基調講演：「読書」で「学び」をデザインする

第三部 読書推進活動と高校・大学における取り組み

第四部 パネルディスカッション

第一部「読書推進活動「注文の多い図書館」の成立まで」では、附属図書館長の青木がシステムの成立経緯について説明した。松岡正剛氏の読む行為についてのコンセプトを基盤としていること、その実践版が帝京大学 MELIC の実施する「読書術コース」であり、本学ではそれを2017年に視察し、2018年に本学独自のシステムを立ち上げて試行し、2019年度に完全実施となったのである。

次に、附属図書館司書の大谷が、本学附属図書館の利用状況、図書館での様々な取り組みの報告に続き、本システムの概要を説明し、実際の入力画面をプロジェクターに映して図書館倶楽部の学生が実際にその場で操作した。説明後、会場からこのシステムにおける質問項目の汎用性について質問があった。これについては、1つの項目について、「小説など」の場合と「評論など」の場合との両方に対応できるように用語解説を付していると答えた。

第二部の基調講演では、帝京大学メディアライブラリーセンター学術情報グループリーダーの中嶋氏が「「読書」で「学び」をデザインする—大学には読書力向上のためのプログラムが必要だ！」と題して、帝京大学 MELIC における「共読」の活動実践についての話があった。これは、すでに8年間の実績を持っている。その中の「読書術コース」について詳細な説明がなされた。これはアプリ化もされており(有料)、学生はそれを自分のスマホにダウンロードし、その中で読んだ本についてメニューに取り組み、それが授業評価の対象となることが説明された。また、授業の際には、松岡正剛氏の編集学校卒業生がナビゲーターとして学生への直接指導に当たっていることなどが、帝京大学の大きな特徴である。これには毎年1,000人が受講し、読書に対するイメージが変わったと答える者が90%近くあるという報告であった。

第三部の「読書推進活動と高校・大学における取組」では、6人のパネリストが登場した。まず、岡岡山県立鴨方高等学校校長で、現在は倉敷商業高等学校国語科教諭の妹尾先生。2000年代に「朝読書」を中国地方で広められた先生で、「朝読書」の考え方と実践についての話があった。先生が国語教師としてぶつかった壁は、「書く」だけではだめだということで、そこから本を「読む」活動が始まったという話であった。しかも「一人残らず読めるようにする」ということが大事であり、それによって生徒が変容し、職員室のコミュニケーションも変わっていったという話であった。本を読むと人が変わるという、貴重な実践の話であった。

次に、「注文の多い図書館」の実践報告に移った。最初に、本学の竹盛が初年次教育の「日本語表現法」での実施報告を行った。図書館を中心とした「読む」領域と「書く」(アカデミック・ライティング)領域をどのように繋げるのかという基本思想に触れながら、「読む」「書く」における多様性(格差)に対応した改善の試みとその成果について報告した。

次は、本システムの試行に参加した高等学校4校の先生が、それぞれの高等学校における「注文の多い図書館」について報告を行った。初めに、図書館の取り組みとして実施した2高校、その後、国語科の授業の中で取り組んだ2高校という登壇の順番である。

広島県立油木高等学校の主幹図書教諭である山崎由美先生。学校図書館として高校3年間の系統性と読書活動全体のバランスの中で、油木高校が独自にこれまで進めてきた「友達にすすめたい本」コンクールなどとの関係を調整しつつ、本学の「注文の多い図書館」に取り組んでいることが語られ、これがすなわち、よりよい表現への指導となっているといった成果についても報告がなされた。盈進中学高等学校の常勤司書である高橋美貴先生は、国語科に依頼して国語の授業で実施したとの話であった。選書については、「手持ちの本」という指示がなされた。また、盈進中学校には読書科があり、高等学校でも朝読書が実施されていて、学年別の「朝読」の課題図書を選ぶ生徒が多かったとの報告があった。さらに、メニューの妥当性については、賛否の反応があることも紹介された。

次は、広島翔洋高等学校の国語科教諭(司書)である須崎智子先生。独自の選択授業科目「本の紹介」と、必修の国語科目とにおける丁寧な取り組みが紹介された。取り組みの成果についても、授業からの視点と図書館からの視点との両面での考察がなされ、3年間を通した本を読む機会の創造という観点において、「注文の多い図書館」に対する一定の評価が認められるとの報告であった。

最後は、尾道中学校・高等学校の国語科教諭である嶋田真友子先生。選書は広く自由にさせたこと、メニューにおける用語についても授業の中で丁寧な説明をしたことなど、取り組みの状況について説明があった。そして、このシステムが読書の契機となり、本の読み方のモデルになること、さらには文章力を問う有効な機会となることなど、取り組みの中から「注文の多い図書館」の成果と意義について報告があった。

シンポジウム開催により見えてきた今後の課題は、本システムの利用を推進し、活用者を増やすことによって、システム自体の充実を図ることであり、それがさらに活用者の増大につながるとい

うプラスの読書運動につなげていくことである。それによって、読書の輪が広がることを目指すことが新たな目標となった。本システムの検証シンポジウムでは、多くの方に好評をいただくことができた。シンポジウムの最後に本学の「注文の多い図書館」へのさらなる参加を呼びかけたところ、6つの高校から、本システムについて積極的な関心を得ることができたので、次年度以降の参加高校の増加に期待ができるだろう。読書推進について、さらに多くの方の思いの結集が実現することを願い、シンポジウムは幕を閉じた。

6.本研究調査の結果—本学における読書推進の成果

本システムの調査は、2017年度後期の試行を踏まえて、2018年度・2019年度の2年間の実施状況によって検証を行った。これによって、本学における読書推進にどの程度成果が現れたと言えるのか、明確なものは見えていない。あるいは学生の読書の習慣化については、参加高校からの本学への入学者がごく少数ということもあり、まだ結果を出すところには程遠いのが現状である。

本学の読書実態を知る上で、貸出冊数、入館者数、データベース利用件数の2017年度～2019年度のデータを比較したところ、2019年度に司書がシステムの使い方を説明した翌月、貸出冊数について、大幅な増加が見受けられた。その他について、システムの利用による利用件数の変動と思われるものは、見受けられず、利用は減少傾向にあり、大きな成果は認められない。ただ、ブックハンティングの参加者数、その本の貸し出し状況については、かすかながら増加傾向にあることが挙げられる。ただ、これと本システム実施との関連性についての調査はできていない。これらの参加者についての利用調査と本システムの利用者アンケートとのクロス集計等が今後の課題である。

7.本研究の結論

前述の通り、本システムは実施の初期段階にあり、今後さらに実施を続けながら調査を続けることが必要である。ただ、利用者(高校生・大学生)アンケートの結果では、「楽しさ」を挙げた者が多かったことは、一つの手ごたえとして残った。それは、本システムの独自性である「独習型」読書指導に一つの成果が見られることを示していると考えている。それは、オンライン上で行う読書指導の可能性についての成果とも重なるところであり、本は一人で読み、一人で味わうところから始まるという、「読書」の原点を気づかせてくれたと言える。そこから、他者へのつながりの世界に出ていくことになるだろう。

課題としては、現在のこのシステムがオンラインとはいえ、学内限定のシステムに依存していることであり、現状では汎用性という点で問題が残る。これについても今後の課題として取り組んでいきたい。